

# 26PA-am174

薬用入浴液は新生児の肌トラブルを予防・改善する

○小番 美鈴<sup>1</sup>, 窪島 裕之<sup>1</sup>, 石澤 太市<sup>1</sup>, 望月 隆<sup>1</sup>, 綱川 光男<sup>1</sup>, 谷野 伸吾<sup>1</sup> (<sup>1</sup>バスクリン)

<目的>新生児(生後 0~28 日)の皮膚は成人に比べ、薄くて柔らかく刺激を受けやすい。毎日の沐浴で皮膚を清潔・保湿することは、健やかな肌を守るために重要である。そこで我々は新生児の入浴及び沐浴実態調査と、薬用入浴液を使った沐浴が新生児のスキンケアに有用であるかを検討した。

<方法>①新生児を持つ保護者(n=357)に対し入浴に関する web 調査を実施した。  
②軽度な肌荒れを認める 3 名を含む新生児計 10 名に、薬用入浴液(ピリドキシソール塩酸塩、茶エキス他を含む乳液状)を沐浴(濃度 0.02~0.08%)、及び清拭(濃度 0.2~0.4%)で 14 日間継続使用した。評価は入浴液の使用前後における全身皮膚状態のスコア化(医師)、角層水分量の測定、保護者アンケートを実施した。

<結果>①新生児の入浴方法は、入浴・沐浴を行っている:93.8%であった。その中から無作為に 100 名を抽出して肌状態と沐浴剤使用有無との関係性について調査を実施した。結果、乳児湿疹:28.0%、カサカサ肌:25.0%、新生児にきび:12.0%、おむつかぶれ:10.0%であった。沐浴剤使用者(n=33)と未使用者(n=67)で比較すると、背部に肌トラブルのある新生児は、未使用者で多い傾向にあった( $p < 0.1$ )。

②薬用入浴液 14 日間の使用により医師所見にて有意な肌状態の改善( $p < 0.05$ )、背部角層水分量の有意な上昇( $p < 0.01$ )が認められた。使用後の保護者アンケートでは、肌がうるおう:80.0%、おむつかぶれし難い:70.0%であった。

<考察>沐浴剤への期待は洗浄作用が高いが、健やかな肌を守るためには保湿作用も必要である。薬用入浴液は、肌状態の改善・角層水分量の上昇を認め、おむつかぶれや乾燥肌から生じる新生児肌トラブルの予防に有用であることが示唆された。